草原を駆ける馬

清宮　聡子

四月から始まったフリーの保育者としての生活も気が付けば二カ月が過ぎようとしていた。毎日が新しい発見と出会いから成り立っているといっても、言い過ぎではない程の充実した生活、毎朝今日はどんな事が起こるだろうと思いながら保育室にむかっていた。そして、その日もいつもと変わらない気持ちで三歳児の保育室に入った。

椅　子

大部分の子ども達が、朝の仕度を終えて思い思いの遊びを展開し始めていた。

A子、B子、D子、E実達がプラフォーミングを出し何かを作っていた。A子が正方形（小）と長方形（小）を組み立てた物を「椅子」と言っている。私は「素敵な椅子ね座って見せて」と声を掛けた。それに応じて座ろうとしていたA子の所にB子、D子、E実、F子らが来た。「私も椅子に座る」と口々に言ったので、四人位が座れるよう一緒に「椅子」を長くした。

最初に座ろうとしていたA子は、いつの間にか長方形（大）を持ち上げ別の椅子を作ろうとしていたので、組み立てるのを助けた。初めに作った椅子よりも高さのあるものができた。子どもの腰より少し高いその「椅子」に早速A子が股がるように座った。F子は初め低い椅子に座っていたが、高い方の「椅子」を見るなり移って来た。側で鋳型ブロックのドーナッツ型を二つカゴに入れ、手にしていたG子が様子を窺っている。「G子ちゃんも座る？」と声を掛けたが、「座らない」と返された。しかし、興味はあるらしく側で皆が嬉しそうに座っているのを見ている。

馬に乗る子ども達

それぞれの椅子に座った子ども達は、椅子を「乗り物」に見立て始めたようで、口々に「出発！」と笑顔で言い始めた。私はB子に「これは電車、それともバス？」と聞いてみた。いすの先端（進行方向の一番前）に座っていたB子は「バスだよ」と運転手のような顔付きで答えた。

一方、高い椅子に股がっているA子とF子を見て私はふと、馬に乗っているようだと思った。「A子ちゃん、F子ちゃん、まるでお馬さ

んに乗っているみたいね」、見たままの印象が口から出た。その一言が子ども達に響いたのか、一瞬の内に子ども達は皆「椅子」や「バス」を「馬」に見立て始めた。

「馬」に乗っているイメージは子ども達の中で自然に広がったようで、A子やF子は股がっている両足を揺らしながら「お馬さん、お馬さん、ソレェー」と言いながら満面の笑みである。F子は鞭を叩く真似までしている。その姿に私も思わず「いいわねー、お馬さんパカパカ走っていて気持ちいいわね」と声を掛けた。

高い方に乗っている二人を見てB子やE実やD子が口々に、「高い方に乗りたい！」と言ったので、高い方を長く組み立ててあげた。六人程度が乗ることの出来る「馬」がそこに完成した。子ども達は、その「馬」に喜んで乗り始めた。A子に「馬は広い草原（くさはら）を走っているの？」と聞くと「うん、そう！」と元気に答えた。皆思い思いに体を揺らしながら、「馬」に乗っているイメージを確かに共有していた。こうなると、出入口の扉から適度に吹き込んで来る風はたちまち草原を駆けながらうける風になってしまう。「気持ちがいいわねー」傍らに立ちながら声を掛ける私に体を揺らしながら子ども達は笑顔で答えた。いつの間にか私も草原に立っている様

な気がしてきた。

「馬」に乗っている子ども達と私のやり取りを、側で見ているだけだったG子が「私も乗りたい」と言って来たので、F子の後ろに乗せてあげた。おままごとコーナーで遊んでいたT雄が、使っていたプラフォーミングを「馬」の側に運び始めた。まだ一緒に乗ろうとはせず、「馬」の最後尾に尻尾らしきものを組み立て始めた。

どの位の時間乗っていたのだろう。子ども達の活動に先程までの勢いが無くなってきていた。そこで、私は子ども達に「広い草原に着きましたよ、ここで　少し休みましょう。お馬さんも沢山走ったし、ここでおいしい草でも食べさせてあげましょう」と声を掛けてみた。A子はすぐに反応して「馬」を降り、「草をあげよう」と言った。それに呼応するかのように次々と子ども達は「馬」から降りた。

私の声掛けに対する反応は想像以上に早く、あっけに取られる私を尻目に子ども達はあっと言う間にプラフォーミングの先端部に集まり手に草を握る真似をして、目には見えない「馬」の口に差し出していた。「ワァー食べてるよ」「本当だ」などと子ども達の会話が聞こえてくる。誰かがプラスチック製のブロックを持って来て「これも食べるかなー？」と集まっている子どもたちに聞いた。「食べるよ、食べるよ」と子ども達は口々に返し、我も我もとブロックを取りに行った。「先生も食べさせてごらんよ」と言ってD子が私にブロックを渡してくれた。

この時、私は子ども達の想像の世界、イメージの力に圧倒されていた。遊びの初めは確かに私がリードしている部分があったと思う。しかし、ブロックを渡された時点で私は子ども達に

ひきずられている自分に気付いた。「馬の顔」らしいものは、どこにも形作られていない。そこにあるのは、プラフォーミングの側面だけである。子ども達の想像力の凄さを眼の当たりにして、ある種のショックを受けた。現実と仮想の世界を子ども達はいとも簡単に行き来出来るのだろうか。理解していたつもりであったが実体験として目の当たりにするとその力に驚かされる。

ブロックを渡されて、私もエサをあげる事になった。「お馬さん噛んだりしないかな」と怖がって見せると、子どもたちは「大丈夫だよ」と言って笑った。恐る恐る手を差し出し「口」にあてて食べさせる真似をすると、「ホラ食べてるよ」と真剣にB子が言った。G子も籠に入れていた緑のブロックを取り出して、「ドーナッツ食べるかな」と私に聞いて来た。「食べるんじゃない」と返すと嬉しそうにブロックを「口」に持って行った。T雄はおままごとコーナーから「食べ物」を持って来て「これも食べるかな?」と言ってあげ始めた。こうして、私は子ども達とイメージを共有しながら、馬に乗って草原を駆けると言う実際には未だ一度もしたこともない素敵な体験をした。

いつも子ども達の世界を一緒に感じ取れる保育者でありたいとあらためて思った一日であった。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）